太極図説

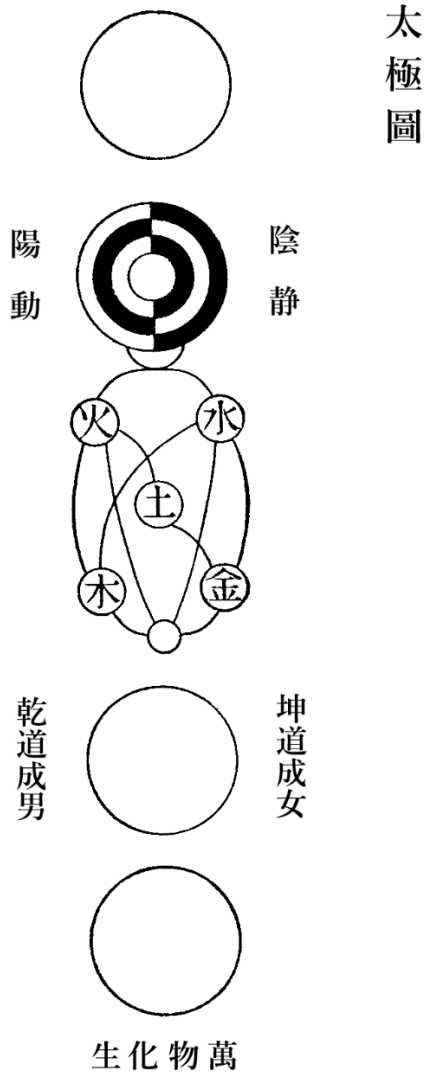
太極図説

デジタル大辞泉

中国、宋代の哲学書。1巻。周敦頤（しゅうとんい）著。成立年未詳。宇宙の生成、人倫の根源を表すとされる「太極図」と、それに施した249字の解説からなる。のち、朱熹が「太極図説解」を著したため、朱子学の聖典とされた。

精選版 日本国語大辞典

中国の儒家書。一巻。北宋の周敦頤(とんい)撰。全文二五〇字で万物の生成を図示した太極図の解説。「易経」に陰陽五行説を採り、生成論から倫理説・修養論を説く。朱子に宋学の淵源と尊ばれた。



現代語訳

無極にして太極である。太極が動いて陽を生じ、動きが極まって静となり、静まって陰を生じる。静まりが極まってまた動く。一動一静が互いにその根元となり、陰に分かれ陽に分かれて、両儀（陰陽）が定まる。

陽が変じ陰が合わさって、水・火・木・金・土を生じる。五つの気（五行）が順に布（し）かれ、四時（四季）が運行する。

五行は一つの陰陽である。陰陽は一つの太極である。太極はもともと無極である。五行の生じる際、それぞれが一つずつその性を持つ。

無極の真と、二五（陰陽と五行）の精が、妙に合わさって凝集する。乾の道は男を成し、坤の道は女を成す。二気が交感して、万物を化生する。万物は生々（次々と生じ）して、変化は無窮である。

ただ人だけが、その秀でた気を得て最も霊長である。形がすでに生じ、精神が知を発し、五性（仁義礼智信）が感応して動き、善と悪が分かれ、万事が出現する。

聖人はこれを定めるに中正仁義を以てし、静を主として、人の極を立てるのである。ゆえに聖人は天地とその徳を合わせ、日月とその明を合わせ、四時とその序を合わせ、鬼神とその吉凶を合わせる。君子はこれを修めて吉であり、小人はこれに背いて凶である。

ゆえに「天の道を立てて陰と陽と言い、地の道を立てて柔と剛と言い、人の道を立てて仁と義と言う」と言う。また「その始めを推し量って終わりに返る、ゆえに死生の説明を知る」と言う。

大いなるかな易よ、これぞその至極である

原文

無極而太極。太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜，互為其根。分陰分陽，兩儀立焉。陽變陰合，而生水火木金土。五氣順布，四時行焉。五行一陰陽也，陰陽一太極也，太極本無極也。五行之生也，各一其性。無極之真，二五之精，妙合而凝。乾道成男，坤道成女。二氣交感，化生萬物。萬物生生，而變化無窮焉。惟人也得其秀而最靈。形既生矣，神發知矣。五性感動，而善惡分，萬事出矣。聖人定之以中正仁義，而主靜，立人極焉。故聖人與天地合其德，日月合其明，四時合其序，鬼神合其吉凶。君子修之吉，小人悖之凶。故曰：立天之道曰陰與陽，立地之道曰柔與剛，立人之道曰仁與義。又曰：原始反終，故知死生之說。大哉易也，斯其至矣。

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%AA%E6%A5%B5%E5%9B%B3%E8%AA%AC

太極図説解

『太極図説解』は、北宋の儒学者・周敦頤（しゅうとんい）が著した宇宙生成論の書『太極図説』に対し、南宋の朱熹（朱子）が註釈・解説を加えたもの。宋代に成立した朱子学における形而上学の基本構造を提示した極めて重要な文献として知られている。

題名と注釈

【原文】太極圖說
【現代語訳】太極図説
【朱熹解附】朱熹の解（注釈）を付す。並びに朱熹の弁（論駁）および注の後記を付す。

無極にして太極である

【原文】無極而太極。
【現代語訳】無極にして太極である。
【朱熹解附】上天の事柄は、音もなく匂いもないが、実際には造化の枢要（中心）であり、万物の根本である。ゆえに「無極にして太極」と言う。太極のほかに、また無極があるわけではない。

太極が動いて陽を生じ

【原文】太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜，互為其根。分陰分陽，兩儀立焉。

【現代語訳】太極が動いて陽を生じ、動きが極まって静となり、静まって陰を生じる。静まりが極まってまた動く。一動一静が互いにその根元となり、陰に分かれ陽に分かれて、両儀（陰陽）が定まる。

【朱熹解附】太極に動静があるのは、天命の流行であり、いわゆる「一陰一陽、これを道と謂う」である。誠とは、聖人の根本であり、万物の終わりと始まりであり、命の道である。

その動は誠の「通（通じること）」であり、これを継ぐものは善で、万物が資して始まるゆえんである。その静は誠の「復（かえること）」であり、これを成すものは性で、万物がそれぞれその性命を正すゆえんである。

動きが極まって静まり、静まりが極まってまた動く、一動一静が互いにその根元となるのは、命が流行してやまないゆえんである。動いて陽を生じ、静まって陰を生じ、陰に分かれ陽に分かれて両儀が定まるのは、分（わけ）が一定して移らないゆえんである。

そもそも太極とは、本来の妙（不可思議な働き）であり、動静はそれが乗じる機（きっかけ・はたらき）である。太極は形而上の道であり、陰陽は形而下の器である。ゆえにその顕著なものからこれを見れば、動と静は時を同じくせず、陰と陽は位を同じくしないが、太極は存在しないところはない。

その微小なものからこれを見れば、空漠として兆しはないが、動静陰陽の理はすでにことごとくその中に具わっている。とはいえ、これを前に推し進めてもその始まりの合一は見えず、これを後ろに引いてもその終わりの分離は見えない。ゆえに程子が「動静には端（はじめ）がなく、陰陽には始（はじめ）がない」と言ったのは、道を知る者でなければ誰がこれを理解できようか。

陽が変じ陰が合わさって

【原文】陽變陰合，而生水火木金土。五氣順布，四時行焉。

【現代語訳】陽が変じ陰が合わさって、水・火・木・金・土を生じる。五つの気（五行）が順に布（し）かれ、四時（四季）が運行する。

【朱熹解附】太極があれば、一動一静して両儀が分かれ、陰陽があれば、一変一合して五行が具わる。しかし五行とは、質（形体）は地に具わり、気は天を運行するものである。

質をもってその生じる順序を言えば、水・火・木・金・土と言い、水と木は陽であり、火と金は陰である。気をもってその運行の順序を言えば、木・火・土・金・水と言い、木と火は陽であり、金と水は陰である。また総括して言えば、気は陽で質は陰であり、交錯して言えば、動は陽で静は陰である。

そもそも五行の変化は究めることができないほどであるが、行き着くところ陰陽の道でないものはない。その陰陽たるゆえんのものに至っては、また行き着くところ太極の本来の姿でないものはなく、どうして欠けたり隙間があったりしようか。

五行は一つの陰陽である

【原文】五行一陰陽也，陰陽一太極也，太極本無極也。五行之生也，各一其性。

【現代語訳】五行は一つの陰陽である。陰陽は一つの太極である。太極はもともと無極である。五行の生じる際、それぞれが一つずつその性を持つ。

【朱熹解附】五行が具われば、造化発育の手段は備わらないものはない。ゆえにまたこれに基づきその根本を推し量り、その渾然一体としたものが無極の妙でないものはないことを明らかにする。そして無極の妙もまた、それぞれの一物の中に具わっていないことはない。

そもそも五行は質を異にし、四時は気を異にするが、皆陰陽の外に出ることはできない。陰陽は位を異にし、動静は時を異にするが、皆太極から離れることはできない。太極たるゆえんのものに至っては、また最初から声や匂いとして言えるものはなく、これこそが性の本体である。

天下にどうして性の外にある事物が存在しようか。しかし五行の生じる際、その気質に従って稟受する（授かる）ものが異なるため、いわゆる「それぞれが一つずつその性を持つ」のである。

それぞれが一つずつその性を持てば、渾然たる太極の全体が、それぞれの一物の中に具わっていないものはなく、性が存在しないところがないこともまた明らかである。

無極の真と、二五の精

【原文】無極之真，二五之精，妙合而凝。乾道成男，坤道成女。二氣交感，化生萬物。萬物生生，而變化無窮焉。

【現代語訳】無極の真と、二五（陰陽と五行）の精が、妙に合わさって凝集する。乾の道は男を成し、坤の道は女を成す。二気が交感して、万物を化生する。万物は生々（次々と生じ）して、変化は無窮である。

天下に性の外にある事物はなく、また性が存在しないところはない。これが無極と二五が混融して隙間がないゆえんであり、いわゆる「妙合」である。

「真」とは理をもって言い、偽りがないことをいう。「精」とは気をもって言い、不二（純一）の名称である。「凝」とは集まることであり、気が集まって形を成すことである。

そもそも性がその主宰となり、陰陽五行がその経緯錯綜（縦糸と横糸の交わり）となり、またそれぞれ類をもって凝集して形を成すのである。陽であって健なるものは男となり、これは父の道である。陰であって順なるものは女となり、これは母の道である。

これが人や物の始まりであり、気の変化によって生じたものである。気が集まって形を成せば、形が交わり気が感応し、ついに形によって変化し、人や物が次々と生じ、変化は無窮となる。男女からこれを見れば、男女はそれぞれ一つずつその性を持ち、男女は一つの太極である。

万物からこれを見れば、万物はそれぞれ一つずつその性を持ち、万物は一つの太極である。およそ合わせて言えば、万物は全体を統括して一つの太極であり、分けて言えば、一つの事物がそれぞれに一つの太極を具えている。いわゆる天下に性の外にある事物はなく、性が存在しないところはないということは、ここにおいてさらにその全貌を見ることができる。

子思子が「君子が小を語れば天下にこれを破る（分割する）ものはなく、大を語れば天下にこれを載せる（包容する）ものはない」と言ったのは、このことである。

人だけが霊長

【原文】惟人也得其秀而最靈。形既生矣，神發知矣。五性感動，而善惡分，萬事出矣。

【現代語訳】ただ人だけが、その秀でた気を得て最も霊長である。形がすでに生じ、精神が知を発し、五性（仁義礼智信）が感応して動き、善と悪が分かれ、万事が出現する。

【朱熹解附】これは、多くの人が動静の理を具えながら、常に動においてそれを失ってしまうことを言ってい

る。そもそも人や物の生じる際、太極の道を具えていないものはない。

しかし陰陽五行の気質が交わり運行する中で、人が稟受するものは独りその秀でた気を得ているため、その心は最も霊長であり、その性の全体を失わないことができる。これがいわゆる天地の心であり、人の極である。

しかし形は陰から生じ、精神は陽から発し、五常の性は物に感応して動き、陽の善と陰の悪がまた類をもって分かれ、五性の違いが散じて万事となる。

およそ二気と五行が万物を化生するが、人においてはこのようである。もし聖人が太極の全体をもってこれを定めることがなければ、欲が動き情が勝り、利害が互いに攻め合い、人の極は確立せず、禽獣（鳥獣）と違わない状況に陥ってしまう。

聖人はこれを定めるに

【原文】聖人定之以中正仁義，而主靜，立人極焉。故聖人與天地合其德，日月合其明，四時合其序，鬼神合其吉凶。

【現代語訳】聖人はこれを定めるに中正仁義を以てし、静を主として、人の極を立てるのである。ゆえに聖人は天地とその徳を合わせ、日月とその明を合わせ、四時とその序を合わせ、鬼神とその吉凶を合わせる。

【朱熹解附】聖人の道は仁義中正のみである。無欲であるから静である。これは、聖人が動静の徳を全うし、常に静を根本とすることを言っている。そもそも人は陰陽五行の秀でた気を稟受して生じるが、聖人の生まれは、さらにその秀でたものの中の秀でたものを得ている。

それゆえ、その行いは中であり、その処し方は正であり、その発露は仁であり、その裁断は義である。そもそも一動一静において、太極の道を全うして欠けるところがないのであれば、先のいわゆる欲が動き情が勝り、利害が互いに攻め合うという状況は、ここにおいて鎮定されるのである。

しかし静とは誠の復（かえること）であり、性の真（本来の姿）である。もしこの心が寂然として無欲であり静かでなければ、どうして事物における変化の応酬に対処し、天下の動を一つに統一できようか。

ゆえに聖人は中正仁義であり、動静はあまねく流転するが、その動きは必ず静を主とする。これこそが、聖人が中位を確立し、天地・日月・四時・鬼神も背くことができないゆえんである。

そもそも必ず体（本体）が確立して、その後に用（働き）が行われる。程子が乾坤の動静を論じて、「専一でなければ直ちに進むことはできず、翕聚（収縮・凝集）でなければ発散することはできない」と言ったのも、この意味である。

君子はこれを修めて吉

【原文】君子修之吉，小人悖之凶。

【現代語訳】君子はこれを修めて吉であり、小人はこれに背いて凶である。

【朱熹解附】聖人は太極の全体であり、一動一静が行き着くところ中正仁義の極みでないことはなく、修養を仮りずとも自然のままである。まだこの域に至らずこれを修めるのが君子が吉であるゆえんであり、これを知らずにこれに背くのが小人が凶であるゆえんである。

これを修めるか背くかは、敬（つつしみ）と肆（ほしいまま）の間にあるのみである。敬であれば欲は少なくなり理は明らかになる。少なくしてさらに少なくし、無に至れば、静のときは虚、動のときは直となり、聖人を学ぶことができるのである。

天の道を立てて

【原文】故曰：立天之道曰陰與陽，立地之道曰柔與剛，立人之道曰仁與義。又曰：原始反終，故知死生之說。

【現代語訳】ゆえに「天の道を立てて陰と陽と言い、地の道を立てて柔と剛と言い、人の道を立てて仁と義と言う」と言う。また「その始めを推し量って終わりに返る、ゆえに死生の説明を知る」と言う。

【朱熹解附】陰陽が象を成すのが天の道の立つゆえんであり、剛柔が質を成すのが地の道の立つゆえんであり、仁義が徳を成すのが人の道の立つゆえんである。道は一つであるのみだが、事柄に従って顕著に現れるため、三才（天地人）の区別があり、またその中にそれぞれ体用の区別があるが、その実は一つの太極である。

陽は、剛であり、仁であり、物の始まりである。陰は、柔であり、義であり、物の終わりである。その始まりを推し量って生じるゆえんを知ることができれば、その終わりに返って死ぬゆえんを知ることができる。これは天地の間で、造化の綱紀となり、古今に流行する、言葉にはできない妙である。聖人が『易』を作ったその大意も、この範囲を出ないものであり、ゆえにこれを引用してその説を証明したのである。

大いなるかな易よ

【原文】大哉易也，斯其至矣。
【現代語訳】大いなるかな易よ、これぞその至極である

『易』という書物は、広大ですべてを備えているが、その至極を語るならば、この図がそれを尽くしている。その旨はどうして深くないことがあろうか。またかつて聞いたところでは、程子兄弟が周子（周敦頤）に学んだ際、周子は自らこの図を手渡して教えたという。

程子が性と天道について語った言葉は、多くがここから出ている。しかし最後まで他人にこの図を明示しなかったのは、そこに必ず深い意図があるからである。学者もまた、これを知らないままでいてはならない。

附弁（補足の論駁）

私がすでにこの説を立てたところ、読者はその分裂が甚だしいと批判し、議論や詰問が紛糾し、応対しきれないことに苦心しているため、総括して論じる。

おおむね非難する者は、あるいは「継ぐものは善、成すものは性」をもって陰陽を分けるべきではないと言い、あるいは太極と陰陽をもって道と器を分けるべきではないと言い、あるいは仁義中正をもって体と用を分けるべきではないと言い、あるいは一つの事物がそれぞれ一つの太極を具えていると言うべきではないと言う。

またある者は、体と用は一つの源であり、体が確立した後に用が行われると言うべきではないと言う。またある者は、仁は全体を統括するものであり、偏って陽の動と指すべきではないと言う。またある者は、仁義中正の区分において、その類を反転させるべきではないと言う。これら数々の説も、皆それぞれ理がある。しかし惜しむらくは、聖賢の意図に対して、皆その一つを得てその二つを遺漏していることである。

そもそも道体の全体は、渾然として一致しているが、精と粗、本と末、内と外、主と客の区分がその中に燦然と存在し、毫釐も違えることはできない。これこそが、聖賢の言葉が、あるいは離れあるいは合わさり、あるいは異なりあるいは同じでありながら、それが道体の全体たるゆえんである。

今いたずらにいわゆる渾然たるものが大であることを知ってこれを語るのを好むが、いわゆる燦然たるものが未だかつて相離れていないことを知らない。それゆえ、同じであることを信じ異なることを疑い、合うことを喜び離れることを悪（にく）み、その論は常に一偏に陥り、ついには目盛りのない秤、寸の目盛りのない物差しになってしまう。なんと誤ったことだろうか。

そもそも善と性は、二つの事物があるとは言えないことは明らかである。しかし「これを継ぐものは善」というのは、陰陽の変化からこれを言ったものであり、「これを成すものは性」というのは、人や物の稟受からこれを言ったものである。陰陽の変化は、流行して未だかつて窮まることなく、これは陽の動である。人や物の稟受は、一定して改めることはできず、これは陰の静である。

これをもって弁別すれば、どうして二者の区分がないと言えようか。しかし性の善は形而上のもの（道）であり、陰陽は形而下のもの（器）である。周子の意図も、どうして単に善を陽とし性を陰としたものであろうか。ただその区分を語るにあたり、これに属すべきだと考えただけである。

陰陽と太極に、二つの理があるとは言えないことは確実である。しかし太極には象（形）がなく、陰陽には気があるのだから、どうして上下の違いがないと言えようか。これが道と器の区別であるゆえんである。ゆえに程子は「形而上を道とし、形而下を器とする、必ずこのように言わねばならない。しかし器もまた道であり、道もまた器である」と言った。この意味を理解して推し量れば、ほぼ偏ることはないだろう。

仁義中正は、同じ一つの理である。しかしこれを分析して体と用とするのは、誠にまだ安んじないものがあるようである。しかし仁とは善の長（長じるもの）であり、中とは嘉（よいこと）の会（集まり）であり、義とは利（よいこと）の宜（よろしいこと）であり、正とは貞（ただしいこと）の体（本体）である。そして元と亨は誠の通であり、利と貞は誠の復である。

そうであれば、どうして体用の区分がないと言えようか。万物の生じることは、同じ一つの太極によるものである。しかしそれがそれぞれに具わっていると言うことには、また疑わしい点がある。しかし一つの事物の中に、天理が完全に具わり、互いに仮りたり貸したりせず、互いに侵したり奪ったりしない、これこそが統括するものに宗（おおもと）があり、集まるものに元（はじめ）があるゆえんである。そうであれば、どうしてそれぞれに一つの太極を具えていると言わずにいられようか。

いわゆる体用一源ということについて言えば、程子の言葉はすでに行き届いている。彼が「体用一源」と言ったのは、至微の理をもってこれを言えば、空漠として兆しはないが、万象が昭然としてすでに具わっているからである。

彼が「顕微無間（顕著なものと微細なものに隙間がない）」と言ったのは、至著の象をもってこれを言えば、事につき物について、この理が存在しないところはないからである。理を言えば、まず体があって後に用がある。そもそも体を挙げれば、すでに用の理が具わっており、これが一源たるゆえんである。

事を言えば、まず顕があって後に微がある。そもそも事につけば、理の体が見えるようになり、これが無間たるゆえんである。そうであるならば、いわゆる一源とは、どうして漫然と精粗・先後の区別がないと言えようか。

ましてすでに体が確立して後に用が行われると言っているのだから、これもまた先にこれ（体）があり後にあれ（用）があることを嫌うものではない。

いわゆる仁が統括する本体であるというのは、程子のいわゆる「専言（専ら言う）」すれば四者を包むというものがこれである。しかしその言葉は「四徳の元（はじめ）は、五常の仁のごとし。偏言（偏って言う）すれば一つの事柄であり、専言（全体として言う）すれば四者を包む」と言っており、これは仁が四者を包むゆえんが、もとより偏言した一つの事柄から離れていないことを示しており、また偏言した一つの事柄を認識せずに、急に専言した統括的な本体を語ることはできないということでもある。

ましてこの図は仁を義と対比させ、さらに中正をこれに参入させている。また陰陽剛柔と同類として扱っているのだから、これもまた専ら言ったもの（専言）とするわけにはいかず、どうして急にその統括する本体をもってこれを語り、陰陽動静の区別に暗いままでいられようか。

中が用となることについては、無過不及（過ぎたるも及ばざるもなし）をもって言ったものであり、いわゆる未発の中を指したものではない。仁が体とならないのも、偏言した一つの事柄をもって言ったものであり、いわゆる専言の仁を指したものではない。これに対比して言えば、正が中の幹となるゆえんであり、義が仁の質となるゆえんであることもまた理解できる。それが体用となることについて、どうして説明がないと言えようか。

おおよそ周子がこの書を作るにあたり、その語意は峻潔で渾然一体としており、条理は精密で疎通している。読者が誠に虚心坦懐に心を一つにし、繰り返し深く味わい、先入観の説に惑わされることがなければ、おそらく周子の心を得ることができ、紛れ多い説に疑いを持つこともなくなるであろう。

注後記

私（朱熹）がすでにこの説を作った後、これを書き写して広漢の張敬夫（張栻）に送った。敬夫は手紙を寄越して、「二先生（程顥・程頤）が門人と講論問答した言葉は、書物に詳しく見えている。

彼らは『西銘』についてはしばしば語ったが、この図については未だかつて一言も言及していない。そこに必ず深い意図があると言うのは、その通りであろう。しかし、そのいわゆる深い意図とは、果たして何なのだろうか？」と言った。私はひそかにこう考える。

この図は象を立てて意を尽くし、幽微な道理を分析しており、周子はこれを得むに已まれず作ったのだと。彼がこれを手渡した意図を見ると、ただ程子こそがこれを理解するにふさわしいと考えたためである。程子に至ってこれを語らなかったのは、これを受け入れる能力のある者がまだいなかったと疑ったからにすぎない。

そもそも言葉や意図の表面に隠された意味を黙識（言葉なしに理解すること）することができなければ、心を空妙の境地に馳せ、耳から入って口から出る（単なる受け売りになる）だけであり、その弊害は必ず言い尽くせないものがある。近年、すでにいくらかこの弊害があると感じている。

彼（程子）が張閎中の『易伝』成書論に答えて、それを受け入れる者がいないことを深く憂慮したことや、『東見録』の中で横渠（張載）の「清虚一大」の説を論じ、人に別の方向へ走らせるようなもので、ただ「敬」を説くのには及ばないとしたことを見れば、その意図も理解できるであろう。

『西銘』であれば、人から推し進めて天に至り、近きから遠きを明らかにし、学者の日常生活において最も親切なものである。この書（太極図説）のように性命の根源に詳しく、進んで行うための細目に欠け、急に語るべきでないものとは異なるのである。

孔子が平生『詩』『書』『礼』について語り、『易』についてはほとんど言及しなかった、その意図もまたこれと同じである。韓退之（韓愈）は「堯舜が民に利益を与えたのは大きく、禹が民を慮ったのは深い」と言った。私は周子と程子についても同じように言う。すでに張敬夫に返答したため、その説をここに記しておく。

乾道癸巳（1173 年）四月既望（16 日）、熹、謹んで書す。

原文一括

1　太極圖（略）
2　太極圖說
3　朱熹解附；並附朱熹辯及注後記
4　無極而太極。
5　上天之載，無聲無臭，而實造化之樞紐，品彙之根柢也。故曰：「無極而太極。」非太極之外，復有無極也。
6　太極動而生陽，動極而靜，靜而生陰。靜極復動。一動一靜，互為其根；分陰分陽，兩儀立焉。

7　　太極之有動靜，是天命之流行也，所謂「一陰一陽之謂道」。誠者，聖人之本，物之終始，而命之道也。其動也，誠之通也，繼之者善，萬物之所資以始也；其靜也，誠之復也，成之者性，萬物各正其性命也。動極而靜，靜極復動，一動一靜，互為其根，命之所以流行而不已也；動而生陽，靜而生陰，分陰分陽，兩儀立焉，分之所以一定而不移也。蓋太極者，本然之妙也；動靜者，所乘之機也。太極，形而上之道也；陰陽，形而下之器也。是以自其著者而觀之，則動靜不同時，陰陽不同位，而太極無不在焉。自其微者而觀之，則沖漠無朕，而動靜陰陽之理，已悉具於其中矣。雖然，推之於前，而不見其始之合；引之於後，而不見其終之離也。故程子曰：「動靜無端，陰陽無始。」非知道者，孰能識之。

8　　陽變陰合，而生水、火、木、金、土。五氣順布，四時行焉。

9　　有太極，則一動一靜而兩儀分；有陰陽，則一變一合而五行具。然五行者，質具於地，而氣行於天者也。以質而語其生之序，則曰水、火、木、金、土，而水、木，陽也，火、金，陰也。以氣而語其行之序，則曰木、火、土、金、水，而木、火，陽也，金、水，陰也。又統而言之，則氣陽而質陰也；又錯而言之，則動陽而靜陰也。蓋五行之變，至於不可窮，然無適而非陰陽之道。至其所以為陰陽者，則又無適而非太極之本然也，夫豈有所虧欠閒隔哉！

10　　五行，一陰陽也；陰陽，一太極也；太極，本無極也。五行之生也，各一其性。

11　　五行具，則造化發育之具無不備矣，故又即此而推本之，以明其渾然一體，莫非無極之妙；而無極之妙，亦未嘗不各具於一物之中也。蓋五行異質，四時異氣，而皆不能外乎陰陽；陰陽異位，動靜異時，而皆不能離乎太極。至於所以為太極者，又初無聲臭之可言，是性之本體然也。天下豈有性外之物哉！然五行之生，隨其氣質而所稟不同，所謂「各一其性」也。

12　　各一其性，則渾然太極之全體，無不各具於一物之中，而性之無所不在，又可見矣。

13　　無極之真，二五之精，妙合而凝。「乾道成男，坤道成女」，二氣交感，化生萬物。萬物生生，而變化無窮焉。

14　　夫天下無性外之物，而性無不在，此無極、二五所以混融而無閒者也，所謂「妙合」者也。

15　　「真」以理言，無妄之謂也；「精」以氣言，不二之名也；「凝」者，聚也，氣聚而成形也。蓋性為之主，而陰陽五行為之經緯錯綜，又各以類凝聚而成形焉。陽而健者成男，則父之道也；陰而順者成女，則母之道也。是人物之始，以氣化而生者也。氣聚成形，則形交氣感，遂以形化，而人物生生，變化無窮矣。自男女而觀之，則男女各一其性，而男女一太極也；自萬物而觀之，則萬物各一其性，而萬物一太極也。蓋合而言之，萬物統體一太極也；分而言之，一物各具一太極也。所謂天下無性外之物，而性無不在者，於此尤可以見其全矣。

16　　子思子曰：「君子語大，天下莫能載焉；語小，天下莫能破焉。」此之謂也。

17　　惟人也，得其秀而最靈。形既生矣，神發知矣，五性感動，而善惡分，萬事出矣。

18　　此言眾人具動靜之理，而常失之於動也。蓋人物之生，莫不有太極之道焉。然陰陽五行，氣質交運，而人之所稟獨得其秀，故其心為最靈，而有以不失其性之全，所謂天地之心，而人之極也。然形生於陰，神發於陽，五常之性，感物而動，而陽善、陰惡，又以類分，而五性之殊，散為萬事。蓋二氣五行，化生萬物，其在人者又如此。自非聖人全體太極有以定之，則欲動情勝，利害相攻，人極不立，而違禽獸不遠矣。

19　　聖人定之以中正仁義，聖人之道，仁義中正而已矣。而主靜，無欲故靜。立人極焉。

20　　故「聖人與天地合其德，日月合其明，四時合其序，鬼神合其吉凶」。

21　　此言聖人全動靜之德，而常本之於靜也。蓋人稟陰陽五行之秀氣以生，而聖人之生，又得其秀之秀者。是以其行之也中，其處之也正，其發之也仁，其裁之也義。蓋一動一靜，莫不有以全夫太極之道，而無所虧焉，則向之所謂欲動情勝、利害相攻者，於此乎定矣。然靜者誠之復，而性之真也。苟非此心寂然無欲而靜，則又何以酬酢事物之變，而一天下之動哉！故聖人中正仁義，動靜周流，而其動也必主乎靜。此其所以成位乎中，而天地日月、四時鬼神，有所不能違也。蓋必體立、而後用有以行，若程子論乾坤動靜，而曰：「不專一則不能直遂，不翕聚則不能發散」，亦此意爾。

22　　君子修之吉，小人悖之凶。

23　聖人太極之全體，一動一靜，無適而非中正仁義之極，蓋不假修為而自然也。未至此而修之，君子之所以吉也；不知此而悖之，小人之所以凶也。修之悖之，亦在乎敬肆之閒而已矣。

24　敬則欲寡而理明，寡之又寡，以至於無，則靜虛動直，而聖可學矣。

25　故曰：「立天之道，曰陰與陽；立地之道，曰柔與剛；立人之道，曰仁與義。」又曰：「原始反終，故知死生之說。」

26　陰陽成象，天道之所以立也；剛柔成質，地道之所以立也；仁義成德，人道之所以立也。道一而已，隨事著見，故有三才之別，而於其中又各有體用之分焉，其實則一太極也。

27　陽也；剛也，仁也，物之始也；陰也，柔也，義也，物之終也。能原其始，而知所以生，則反其終而知所以死矣。此天地之閒，綱紀造化，流行古今，不言之妙。聖人作易，其大意蓋不出此，故引之以證其說。

28　大哉易也，斯其至矣！

29　易之為書，廣大悉備，然語其至極，則此圖盡之。其指豈不深哉！抑嘗聞之，程子昆弟之學於周子也，周子手是圖以授之。程子之言性與天道，多出於此。然卒未嘗明以此圖示人，是則必有微意焉。學者亦不可以不知也。

30　〔附辯〕愚既為此說，讀者病其分裂已甚，辨詰紛然，苦於酬應之不給也，故總而論之。大抵難者：或謂不當以繼善成性分陰陽，或謂不當以太極陰陽分道器，或謂不當以仁義中正分體用，或謂不當言一物各具一太極。又有謂體用一源，不可言體立而後用行者；又有謂仁為統體，不可偏指為陽動者；又有謂仁義中正之分，不當反其類者。是數者之說，亦皆有理。然惜其於聖賢之意，皆得其一而遺其二也。夫道體之全，渾然一致，而精粗本末、內外賓主之分，粲然於其中，有不可以毫釐差者。此聖賢之言，所以或離或合，或異或同，而乃所以為道體之全也。今徒知所謂渾然者之為大而樂言之，而不知夫所謂粲然者之未始相離也。是以信同疑異，喜合惡離，其論每陷於一偏，卒為無星之稱，無寸之尺而已。豈不誤哉！

31　夫善之與性，不可謂有二物，明矣！然繼之者善，自其陰陽變化而言也；成之者性，自夫人物稟受而言也。陰陽變化，流行而未始有窮，陽之動也；人物稟受，一定而不可易〔 〕，陰之靜也。以此辨之，則亦安得無二者之分哉！然性善，形而上者也；陰陽，形而下者也。周子之意，亦豈直指善為陽而性為陰哉。但話其分，則以為當屬之此耳。

32　陰陽太極，不可謂有二理必矣。然太極無象，而陰陽有氣，則亦安得而無上下之殊哉！此其所以為道器之別也。故程子曰：「形而上為道，形而下為器，須著如此說。然器，亦道也，道，亦器也。」得此意而推之，則庶乎其不偏矣。

33　仁義中正，同乎一理者也。而析為體用，誠若有未安者。然仁者，善之長也；中者，嘉之會也；義者，利之宜也；正者，貞之體也。而元亨者，誠之通也；利貞者，誠之復也。

34　是則安得為無體用之分哉！萬物之生，同一太極者也。而謂其各具，則亦有可疑者。然一物之中，天理完具，不相假借，不相陵奪，此統之所以有宗，會之所以有元也。是則安得不曰各具一太極哉！

35　若夫所謂體用一源者，程子之言蓋已密矣。其曰「體用一源」者，以至微之理言之，則沖漠無朕，而萬象昭然已具也。其曰「顯微無閒」者，以至著之象言之，則即事即物，而此理無乎不在也。言理則先體而後用，蓋舉體而用之理已具，是所以為一源也。言事則先顯而後微，蓋即事而理之體可見，是所以為無閒也。然則所謂一源者，是豈漫無精粗先後之可言哉？

36　況既曰體立而後用行，則亦不嫌於先有此而後有彼矣。

37　所謂仁為統體者，則程子所謂專言之而包四者是也。然其言蓋曰四德之元，猶五常之仁，偏言則一事，專言則包四者，則是仁之所以包夫四者，固未嘗離夫偏言之一事，亦未有不識夫偏言之一事而可以驟語夫專言之統體者也。況此圖以仁配義，而復以中正參焉。又與陰陽剛柔為類，則亦不得為專言之矣，安得遽以夫統體者言之，而昧夫陰陽動靜之別哉。至於中之為用，則以無過不及者言之，而非指所謂未發之中也。仁不為體，則亦以偏言一事者言之，而非指所謂專言之仁也。對此而言，則正者所以為中之榦，而義者所以為仁之質，又可知矣。

其為體用，亦豈為無說哉？

38　大抵周子之為是書，語意峻潔而混成，條理精密而疏暢。讀者誠能虛心一意，反覆潛玩，而毋以先入之說亂焉，則庶幾其有得乎周子之心，而無疑於紛紛之說矣。

39　〔注後記〕熹既為此說，嘗錄以寄廣漢張敬夫。敬夫以書來曰：「二先生所與門人講論問答之言，見於書者詳矣。其於西銘，蓋屢言之，至此圖，則未嘗一言及也，謂其必有微意，是則固然。然所謂微意者，果何謂耶？」熹竊謂以為此圖立象盡意，剖析幽微，周子蓋不得已而作也。觀其手授之意，蓋以為惟程子為能當之。至程子而不言，則疑其未有能受之者爾。夫既未能默識於言意之表，則馳心空妙，入耳出口，其弊必有不勝言者。近年已覺頗有此弊矣。觀其答張閎中論易傳成書，深患無受之者，及東見錄中論橫渠清虛一大之說，使人向別處走，不若且只道敬，則其意亦可見矣。若西銘則推人以之天，即近以明遠，於學者日用最為親切，非若此書詳於性命之原，而略於進為之目，有不可以驟而語者也。孔子雅言詩、書、執禮，而於易則鮮及焉。其意亦猶此耳。韓子曰：「堯舜之利民也大，禹之慮民也深。」熹於周子、程子亦云。既以復於敬夫，因記其說於此。乾道癸巳四月既望，熹謹書。

https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=323161